



ソドムの町には、アブラハムの甥口トとその家族が住んでいました。そこは土地が豊かで潤っており、人々が生活するにはすばらしい場所でした。ところが、ソドムに住む人々はとても罪深く、悪いことが平気で行われていました。神さまは、ソドムを滅ぼすことをお考えになっていました。

▼そこで神さまはこう言われました。「私がかれからしようとすることを、アブラハムに隠しておいてよいだろうか。アブラハムは私が選んだ者であり、彼を通してすべての人が祝福されていく存在だ。だから彼もまた、正しいことを行って主の道を守る必要がある」。神さまはアブラハムに打ちあげられました。「アブラハム、聞きなさい。ソドムとゴモラの町は、悪いことで満ちていて、その罪はきわめて重い。私はこれから彼らの状態を見て確

かめ、滅ぼそうと考えている」。

アブラハムは、それを聞いて主の前に立ちました。神さまに自分の考えを申し上げなくては、と思ったからです。▼「神さま。ちよつと待つてください。悪い人を滅ぼされるのはわかりますが、正しい人も一緒に滅ぼされてしまうのですか。もしかしたら、あの町の中には50人の正しい人がいるかもしれません。それでも、滅ぼしてしまわれるのですか。もし正しい人も悪い人と一緒に滅びてしまうなら、それはおかしいことです。神さまが公正な裁きを行わないことなど、ありません」。

それを聞いた神さまは言いました。「もしソドムの町に50人の正しい人がいるなら、その人のために町全体をゆるそう」。

アブラハムは答えました。「何の価値もない私ですが、あえて言わせてください。もしかししたら、50人に五人足りないかもしれません。それでも滅ぼされますか」。神さまは言いました。「45人いるとしたら、滅ぼしはしない」。アブラハムは続けて神さまに訴えます。「もしかすると、そこには40人しかないかもしれません」。神さまは言いました。「その40人のために何もしない」。

▼「神さま、どうか怒らないでください。もしかししたら、30人しかないかもしれません」。「30人いるなら、何もしない」。「本当ですか。では20人だったら。20人のために、滅ぼさない」。50人から20人まで減りましたが、アブラハムはまだ不安でした。「神さま、もう一度だけ言わせてください。もしかしした10人しかないかもしれません」。「その10人のために、私は滅ぼさない」。これを聞いて、アブラハムは神さまにお願いするのをやめました。

結局アブラハムは、神さまに六回も続けてお願いをしました。なかなか勇気がいることです。しかし「どうか怒らないでください」と言いながら、何とかしてソドムを助けてもらおうとしました。その祈りは、神さまにとつてうれいものだったのではないでしょうか。

▼神さまは、私たちが他者のために祈る祈りを聞いておられます。祈られている人を、神さまもまた大切に思っておられるからです。また誰かのために祈る人は、神さまとその人の間に立っています。そこに立てるのは神さまの恵みを知っている人。神さまはその祈りを聞き届けてくださるのです。